

『大戴礼記』用兵篇の構成とその成立時期

著者	井上 了
雑誌名	集刊東洋学
巻	107
ページ	149-160
発行年	2012-06-30
URL	http://hdl.handle.net/10097/00132708

『大戴礼記』 用兵篇の構成とその成立時期

井上 了

はじめに

『大戴礼記』のうち千乘・四代・虞戴德・誥志・小弁・用兵・少間の七篇はすべて「公」(魯哀公)と「子」(孔子)との問答から成るいわゆる哀公孔子問答の形をとっており、これら七篇は『漢書』芸文志に見える「『孔子三朝七篇』の遺文だと一般に認められている。ただしこれら七篇それぞれの内容はかなり雑駁で、もしこれが『孔子三朝』なる単一の文獻に出るものだとするれば、『孔子三朝』とは雑多な素材を寄せ集めて哀公孔子問答の形に整理した編纂物であつたろう。

『孔子三朝』の書名が『漢書』芸文志に見えることからこの書が劉向校書以前に成立していたことは明らかで、また『漢書』楚元王伝に引く劉向の元延中上奏に用兵篇の後半部にはほぼ一致する文が引かれていることから、この文が

劉向の時までに何らかの哀公孔子問答に組み込まれていたことがわかる。⁽³⁾劉向の見た『孔子三朝』七篇は現行の千乘等七篇に近いものであつたと考えてひとまず差し支えなからう。

筆者は先に『大戴礼記』少間篇が前漢武帝期の地理認識を反映していることを指摘し、その完成は前一三〇年代から前一二〇年代だろうとした。⁽⁴⁾末永高康氏は筆者前稿に対し詳細な検討を加えて筆者の疑古的な見解を批判し、千乘等七篇の内部に「形式の共有」「共通の言い回し」を認め七篇をまとまつたものと見た上で、その編纂を「荀子以前」と結論した。⁽⁵⁾末永氏は、千乘等七篇は相違する素材を用いつつ「同一の編者によって比較的短期間に編まれた」ものとしており、筆者はこれに全く同意する。ただし、その編まれた時期を荀子以前とするか漢代とするかという相違はやはり重大なものとして残るだろう。⁽⁶⁾

本稿では、千乗等七篇のうち用兵篇について、その主題や用語等の相違に注目して分段し、各部分の特徴などを確認しつつその成立について検討したい。この作業は、『孔子三朝』ひいては『大戴礼記』の編纂事情を考えるための一助ともなるであらう。

用兵篇の構成概観

『大戴礼記』用兵篇は全四百四十四字と比較的短く、「公」の発問と「子」の回答を三たび繰りかえし、末尾を「公」の嘆辭で締めくくる。用兵篇に四見する「公」の發言はみな五字から十字、「子」の第一言が三十八字、第二言が十字と短いのに對して「子」の第三言のみが三百四十八字にも及び、篇の後半は「子」の独演場となっている。しかし、この孔子第三言（に仮託した長文の論述）が用兵篇の中心部分で、篇の前半は單にこれを導くための形式的な問答なのかというと、必ずしもそうとは言ひ切れない。孔子第三言の中ほどには「詩云」として「魚在在藻、厥志在餌。鮮民之生矣、不如死之久矣。校徳不塞、嗣武孫武子。」の六句が引かれており、篇末に「詩」「書」等を引いて総括する形式は古書に常見することから、この引詩はもともと何らかの文献の末尾に置かれていた総括で、この文献が用兵

篇の一部として取り込まれた際に篇中に残存したものと考えられるのだ。すなわち用兵篇の孔子第三言はもともと一連の論述としてまとまったものではなく、その途中（『詩』を引いた総括）までが一箇の文献で、その後にもそのまゝ（『公』の發問や「子曰」などを補わず）別箇の文献を接合したものである。

用兵篇をその冒頭から「詩云……嗣武孫武子」までの前半百八十九字と「聖人愛百姓」から末尾までの後半二百五十五字とに分けてみれば、前半部は兵器・兵事の起源を議論するのに對して、後半部は堯舜禹湯文武と對比して夏桀商紂の失政を述べており、前半部と後半部とは内容上ほとんど連関がない。また、前半部は「公曰」「子曰」の問答体で構成されているのに對して後半部はほぼ完全な論述体となっており、ただ末尾に「公懼焉曰、在民上者、可以無懼乎哉」という嘆辭をいわば取って付ける。これは、もともと問答体であつた前半部に論述文であつた後半部を接合し、全体を哀公孔子問答の体裁（『孔子三朝』全体を貫く体裁）に合わせるため末尾に哀公の嘆辭を附加したものと解される。翻言すれば、前半部を問答体にて作成した者と、全体を問答体に揃えるため篇末に哀公嘆辭を補った者とは別だということが、用兵篇を一見した印象としてまづ窺える。

さらに細かく見れば、前半部は兵事の祥不祥について問答する部分と兵事の起源について問答する部分とに分けることができ、また後半部は堯舜禹湯文武を讃える部分と夏桀商紂を批判する部分、及び哀公の嘆辭により篇全体を締めくくる部分に分けることができる。本稿では以下これらの各部分について次のように呼称することとする。

「第一段」…兵事の祥不祥に関する問答。（五十字）

「第二段」…兵事の起源に関する問答と引詩による総括。

（百三十九字）

「第三段」…堯舜禹湯文武への賛辭。（六十九字）

「第四段」…夏桀商紂への批判。（百七十二字）

「第五段」…末尾の哀公嘆辭（十四字）。

前半部の特徴……『呂氏春秋』蕩兵篇との類似

まず用兵篇の前半部（第一段及び第二段）は、戦争や殺人を一律には否定せず、『呂氏春秋』蕩兵篇と同様に聖人による武力行使を賛美するいわゆる義兵説を主張する。また「蚩尤作兵」という異説をわざわざ取り上げて否定しており、これまた蕩兵篇に似る。ただし蕩兵篇は、暴力の起源について「民之有威力、性也。性者所受於天也、非人之所能為也。（民の威力有るは、性なり。性は天に受くる所

にして、人の能く為す所には非ず。）」と天与の性によるものとしつつ、その性が具体的にいかなるものかについては詳説しない。これに対して用兵篇は「蜂蜚螫而生、見害而校、以衛厥身者也。人生有喜怒、故兵之作、与民皆生。（蜂蜚は挟み螫して生き、害われて校い、以て厥の身を衛る者なり。人は生れながらにして喜怒有り、故に兵の作るや、民と皆に生ず。）」と、兵事の発生原因をより具体的に踏み込んで説明する。用兵篇の主張は『荀子』性惡篇の「今人之性、生而有好利焉。順是、故争奪生而辭讓亡焉。（今人の性、生れながらにして利を好む有り、是に順う、故に争奪生じて辭讓亡ぶ。）」と内容的にも修辭的にも近く、また『荀子』には他にも「人生而有欲」（礼論）、「人生而有知」（解蔽）等とあつてこれらは『荀子』に特徴的な句法であれば、用兵篇の前半部は荀子の影響下に作成されたものとはまず予想される。

なお『淮南子』兵略訓も人間や動物について「喜而相戲、怒而相害、天之性也。（喜びて相い戯れ、怒りて相い害う、天の性なり。）」と述べ、しかも「人有衣食之情而物弗能足也。故群居雜處、分不均求不贍、則争。（人 衣食の情有りて物足る能わず。故に群居雜處して、分均しからず求贍らざれば、則ち争う。）」とやはり『荀子』的な論を展開する。しかし兵略訓はもはや蚩尤という特定の神格に言及せ

ず、これに代えて「貪味饕餮之人」を取り上げる。⁽¹⁾『呂氏春秋』と『淮南子』との間に直線的な承受と改変を想定できるならば、『淮南子』よりも『呂氏春秋』に近い用兵篇（の前半部）は戦国最末から漢初に位置づけるのが適當だろう。さらに『史記』律書や銀雀山漢墓竹簡『孫臏兵法』などにもこれらによく似た表現が見出され、人間や動物が持ち生まれた本能によるものとして兵事を正当化することは、漢初にひろく行われた議論であつたらしい。

また、第二段の末尾に引かれる『詩』を現行の『毛詩』と比較すれば、用兵篇引詩のうち「鮮民之生矣、不如死之久矣。」は『毛詩』小雅蓼莪「鮮民之生、不如死之久矣。」にはほぼ一致するが、他の四句は小雅魚藻や商頌玄鳥に一致しない。⁽²⁾この引詩総括は『詩』経文の固定（三家詩の出現と權威化）以前に作文されたことが窺え、総括の対象とされた引詩以前の本文はさらに古いものとなろう。

「厥」と「其」との使い分け

用兵篇の引詩のうち「魚在在藻、厥志在餌。」は『毛詩』小雅魚藻「魚在在藻、有頌其首」「魚在在藻、有華其尾」「魚在在藻、依于其蒲」とやや類似する。しかし用兵篇の引詩では代詞として「其」ではなく「厥」が用いられ、その前

後でも「不顧厥親」「喪厥身」など「厥」が散見することが注目される。

そもそも「厥」は『尚書』や『詩』の古い部分に見えるが戦国期にはいったんその用例を減じ、漢代以降の擬古的な詔文等において再び多く用いられるようになる。⁽³⁾『大戴礼記』について言えば、夏小正のいわゆる経文に二例、衛將軍文字篇に一例が見える他には、四代（二例）・諸志（二例）・用兵（七例）・少間（一例）の諸篇に計十一例が見えるのみで、千乗等七篇への偏在に注意せざるを得ない。たまたま「厥」字を用いる七篇を輯めて『孔子三朝』が作成されたとは考えがたく、七篇が一書としてまとめられた際あるいはそれ以降に擬古的な意図をもって「其」を「厥」へ置換したものであろう。用兵篇の引詩に「厥」字が見えるのは用兵篇が参照した『詩』の異文によるものではなく、千乗等七篇の立場による改字となる。

ところで用兵篇第一段では「用兵者其由不祥乎」「胡為其不祥也」と「其」を用い、第二段では一貫して「厥」が用いられる。第一段が後次的に付加されたため生じた相違かとも疑い得るが、文法的に「胡為厥不祥也」等とは置換し得なかつた等の理由により「其」を存したものとしばらく考えておく。

さらに用兵篇の後半部についても「其」「厥」の使い分

けを確認してみると、後半部のうち「堯舜禹湯文武」を宣揚する第三段では「其」を用い、「夏桀商紂」を批判する第四段は基本的に「厥」を用いて末節の「夫天下之報殃於無德者也、必与其民。」でのみ「其」字を用いるという比較的あきらかな特徴が認められる。このことは、堯舜禹等と夏桀商紂とを対比させるという用兵篇の構成が本来のものでなく、第三段（と第四段末節の評語）が第四段よりも遅れて千乘篇へ附加されたという可能性を示唆する。

第三段の特徴……盛徳篇との類似

じつさい用兵篇第三段に酷似する文章が『大戴礼記』盛徳篇に見えており、しかも盛徳篇のほうが長文でかつ全体のとまともも良い。用兵篇を踏まえて盛徳篇が作文されたとは考えにくく、逆に盛徳篇（あるいはその祖本）から切り出された文章が用兵篇に嵌め込まれたとすべきであろう。このような、いわば切り貼りによる水平伝播の時期を特定するのは難しいが、強いて挙げれば盛徳篇が「五帝三王」とする部分を用兵篇第三段が「堯舜禹湯文武」と改めていることが注意される。千乘等七篇は一般に「三王」ではなく「四代」（四代篇）・「四代五王」（少間篇）を説いており、盛徳篇から「五帝三王」に係る文章を取り込む際に

「三王」の語を嫌って「堯舜禹湯文武」を列挙する形に改めたものか。ならば第三段は、七篇合綴の後あまり遅くない時点で用兵篇に取り込まれたものと考えられる。

第四段の特徴……盛徳篇との類似

用兵篇第四段は、夏桀商紂が失政により「諸侯力政、不朝於天子。六蛮四夷、交伐於中国。（諸侯力政し、天子に朝せず。六蛮四夷、交も中国を伐つ。）」という諸侯の離反と外族の侵入を招いたのみならず、「降之災、水旱臻焉、霜雪大滴、甘露不降、百草殫黄、五穀不升、民多夭疾、六畜瘁皆。（之に災を降し、水旱は臻り、霜雪は大いに満ち、甘露は降らず、百草は殫黄し、五穀は升らず、民は多く夭疾し、六畜は瘁皆す。）」という天災地変をもたらしたと述べる。これは『荀子』的な天人分離説とは相容れない政治思想で、『礼記』礼運篇や『大戴礼記』誥志篇などが善政により天災をも予防できるとすることと表裏をなす、極端な天人相関の思想といえる。このように天人の調和を理想とする第四段の思想が、人間や動物は本来あい争うものだとする第二段の義兵説と同じでないことは首肯されよう。

なお用兵篇の「諸侯力政、不朝於天子。六蛮四夷、交伐於中国。」は『淮南子』要略「齊桓公之時、天子卑弱、諸

侯、力、征、南、夷、北、狄、交、伐、中、国。」や「公羊伝」僖公四年「南夷与北狄交、中国不絶若綫。桓公救中国而攘夷狄。」あるいは「穀梁伝」昭公十二年「其曰晋、狄之也。其狄之何也。不正其与夷狄交、伐中国、故狄称之也。」と類似する。とりわけ「交伐於中国」は上の「不朝於天子」と句形を揃えるため文法的な無理を犯した（本来不要な「於」字を加えた）もので、「淮南子」「穀梁伝」等に見える「交伐中国」句を踏まえた作文であろう。また「六蜚」なる語は「爾雅」釈地に初見して先秦の用例を得ず、いずれもこの部分が漢代に成立したことを疑わせる。

第五段……哀公嘆辞による総括

用兵篇の末尾（第五段）は「公懼焉曰、在民上者、可以無懼乎哉。」という短い嘆辞で全体を締めくくっており、すでに述べたようにこの十四字は最終的に用兵篇へ附加されたものと思われる。

千乗等七篇のうち諸志・小弁の二篇は末尾に哀公言を欠いており孔子の「言いっぱなし」で終わるが、千乗・四代・虞戴徳・少間の四篇はいずれも末尾を「公曰、善哉。」で締めくくるといふ形式を共有しており、これらは七篇が一書にまとめられた際の整理の結果と思われる。用兵篇の終

わり方のみが特異だが、直前の孔子言が桀紂の失政に係るものである以上はこれを「善哉。」と総括することは困難であつたらう。

「為民上者」あるいは「為人上者」の句は多くの文献に見えるが「在民上者」は意外にも稀見に属し、用兵篇の他には「漢書」貨殖伝が「論語」を踏まえて「於是在民上者、道之以徳、齊之以礼、故民有恥而且敬、貴誼而賤利。」とし、また王基による曹魏明帝への上疏（「三国志」本伝）が「荀子」を踏まえて「臣聞、古人以水喻民曰、水所以載舟、亦所以覆舟。故在民上者、不可以不戒懼。」とする程度で、先秦の用例を見ない。とくに王基上疏と用兵篇「在民上者、可以無懼乎哉。」との類似は注目され、また魏末晋初の庾嶠「石榴賦」序（「芸文類聚」八十六）には「君子居安思危、在盛慮衰、可無懼哉。」とあつて、用兵篇第五段の用いる表現がそれほど古くないことを示唆する。

七篇の合綴時期の上限……避諱の不統一

ところで用兵篇第四段の「霜雪大満」や諸志篇の「河不満溢」はいずれも前漢恵帝（劉盈）の諱を避けた改字と思われる。⁽²⁾千乗等七篇には他にも四代篇が「詩」東有啓明を引いて「東有開明」と改め、諸志篇には「冰泮發蛰」とあつ

て、景帝（劉啓）に対する避諱代字が一定しない⁽²⁾。これらは七篇が一書にまとめられた後に一括して改められたものとは思われず、独立に避諱改字された複数の文献が改字後に合綴されたことを示唆する。すなわち、これら七篇が『孔子三朝』なる一書としてまとめられたのは景帝即位（前一五七年）以降となる。七篇の全体が問答体に統一されたものもおそらくこの編纂の際で、「吁焉其色曰」「公曰善哉」といった特徴的な導言もこの際に附加されたものだろう⁽³⁾。

要するに、用兵篇を含む千乗等七篇について、これらを文帝期以前の形を忠実に保存するものとみたり、ましてや戦国期の形をそのまま存するものとみるのは困難である。

千乗等の七篇は、前漢景帝期以降かつ劉向校書以前のある時点で『孔子三朝』なる一書として整理された。この意味においてこれら七篇は「前漢の特定時点で比較的短期間にまとめられた」と言える。しかしこれら七篇は、この時に何もない所からいきなり出現したものでは当然ない。これらの諸篇は漢初以前から徐々に形成されてきた複数の文献としてあったもので、また『孔子三朝』七篇としてまとめられた後にも各篇それぞれに訛伝や改変を蒙っている⁽⁴⁾。この意味で、これら七篇は「長期にわたり改変され続けてきた」と言うこともでき、その期間はおそらく戦国末から前漢後期、あるいは王莽期にまで降るであろう。

まとめ

本稿では、この短い篇をさらに五分して検討した。

まず第二段の哀公孔子問答は、『呂氏春秋』のそれに近い義兵説を述べ、また『荀子』との共通点も多い。この部分は荀子以降の作文とすべきだが、末尾の引詩は現行の蓼莪や玄鳥とは大きく異なる。これらを蓼莪等の異文とせず逸詩とみる説さえある程で、いずれにせよこの部分の作者が参照した『詩』が現行本『毛詩』とは大きく異なるものであったことは動かせない。この部分は戦国末から漢初までにいったん成立していた、用兵篇の中でも比較的古い部分とみてよからう。

第四段に見える災異説は逆に、『荀子』的な天人分離説からもっとも遠く、『礼記』礼運篇や『大戴礼記』誥志篇などに見える天人相関説に近い。このような思想が戦国以前から広く受容されていた可能性はもちろん否定できないが、その用語・表現が『淮南子』や『穀梁伝』を踏まえているらしきことを併せ考えると、この部分は漢代の作文としておくのが穏当だろう。この部分が問答体の形をとっていないこと等から、これは七篇合綴よりもやや後（早くとも景帝期以降）に用兵篇に附加されたものと考えたい。

以上の第二段・第四段は代詞として「厥」を用いるが、

第一段・第三段はもつばら「其」を用いる。うち第一段はそもそも第二段と一体だったものか否か判然としないが、第三段は『大戴礼記』盛徳篇から取った文と思われ、やはり千乗等七篇が一書にまとめられた後、しかも「其」を「厥」に改める擬古的な操作が施された後に挿入されたものである。そして第五段はもつとも新しく、全体を哀公孔子問答の形式に揃えるため最終的に付加されたものと思われる。

注

(1) 本文中には「公」「子」が何者であるか明記されていないが、虞戴德・諸志・小弁・少間の諸篇で「子」が「丘」と自称しており、この「子」が孔子だと設定されていることは明らか。

なお『大戴礼記』には哀公孔子問答として哀公問五義・哀公問於孔子の両篇もあるが、哀公問五義篇は全体を「哀公曰」「孔子曰」とし、哀公問於孔子篇は冒頭で「哀公」の名を掲げて全体を「公曰」「孔子曰」としており、いずれも千乗等七篇の体裁とは異なる。これらは千乗等七篇とはその由来を異にするものと思われるが、そもそも『大戴礼記』とは一部の叢書であり、由来を異にする哀公孔子問答が併せて含まれることは当然あり得よう。

(2) 王応麟『漢藝文志攷証』・『四庫全書総目提要』等。『三國志』秦宓伝「昔孔子三見哀公、言成七卷」の装注に「劉向『七略』曰、「孔子三見哀公、作『三朝記』七篇」。今在『大戴礼』。臣松之案、中經部有『孔子三朝』八卷」、一卷目録、余者所謂『七篇』。」とあるので、西晋の『中經新簿』に著録されていた『孔子三朝』を劉宋の裴松之はすでに実見できなかったようだ。

(3) 『漢書』に載せる劉向の上奏は「昔孔子対魯哀公並言、夏桀殷紂暴虐天下、故曆失則、攝提失方、孟陬無紀、」としており、『大戴礼記』用兵篇の第四段(後述)は「夏桀商紂」について「曆失制、攝提失方、鄭大無紀、」とする。なお『漢書』律曆志の「閏余乖次、孟陬殄滅、攝提失方、」や『史記』曆書の「孟陬殄滅、攝提無紀、曆数失序、」は孔子の発言とはされておらず、また桀紂の頃ではなく五帝の時のこととされている。

(4) 拙稿『大戴礼記』少問篇の西方観とその成立時期(本誌一〇二号、二〇〇九年)。

(5) 末永高康『孔子三朝記』初探(『鹿児島大学教育学部研究紀要』人文・社会科学編六二、二〇一一年)／『南京師範大学文学学院学報』二〇一一年第一〇一期。

(6) 末永氏は千乗等七篇が「先秦古書であることを疑わせる部分」をいくつか指摘し(四代篇に見える刑德陰陽説が董仲舒以前に遡り得ないこと、小弁篇に「爾雅」の書名が見えること等)「懷疑的な目で眺めるならば、千乗等七篇の晩出を疑い得る事例をさらに多く提示できるかも知れない」

い。」とするが、「それが単に「疑い得る」にとどまり、より積極的に晩出を証明できるものでないならば、これを先秦古籍と見なして研究を進めていくことに問題はないとおもわれる。」という。筆者としては、漢代以降に作文されたかと疑わせる文言が独立して多く指摘できるならば、そのような文献を先秦古籍とみなすことにはやはり慎重でありたい。

筆者の疑古的な立場は末永氏の積極的な進取の方針とは異なるが、現在の日本においては数少ない『大戴礼記』研究が互いにその見解を大きく異にすることは、むしろ研究史上の幸いだと考える。

(7) 『大戴礼記』については『四部叢刊』本（景明嘉靖癸巳吳郡袁氏嘉趣堂覆南宋淳熙乙未刊本）を用いる。

(8) 千乘篇や四代篇には逆に、二つの孔子言を（間に「公」の発言を挟まず）連続させるといふ不自然な構成も認められる。

(9) ともに論述体であった「聖人之用兵也」「聖人愛百姓」の二篇を接合してから全体を哀公孔子問答の体裁に整えたという過程も想定し得るが、その場合には、同一の編者が前半部を問答体に改変しながら後半部を長文の論述体のまま存した理由が説明されねばなるまい。なお問答体の前半部に論述体の後半部が接合されているという形は、詁志篇にも同様に認められる。

(10) 義兵説については蕩兵篇に「古聖王、有義兵而無有偃兵。」とあり、用兵篇には「聖人之用兵也、以禁残止暴虐於天下

也。」とある。また兵事の由来については蕩兵篇に「兵之所自来者上矣、与始有民俱。凡兵也者、威也。威也者、力也。民之有威力、性也。性者、所受於天也、非人之所能為也。」「争門之所自来者久矣、不可禁、不可止。故古之賢王有義兵而無有偃兵。」とあり、用兵篇に「傷害之生久矣、与民皆生。」「人生有喜怒、故兵之作与民皆生。聖人利用而弥之、乱人与之喪厥身。」とある等。

(11) 蕩兵篇に「人曰、蚩尤作兵。蚩尤非作兵也、利其械矣。」とあり、用兵篇には「公曰、蚩尤作兵与。子曰、否。蚩尤庶人之貪者也。……何器能作。」とある。

湯淺邦弘「軍神の変容——中国古代に於ける戦争論の展開と蚩尤像——（1）」（『島根大学教育学部紀要（人文・社会科学）』二六、平成四年。のち「戦いの神——中国古代兵学の展開——」（研文出版、二〇〇七年）に収録）は、「多くの資料が大前提とする蚩尤作兵説を、『呂氏春秋』蕩兵篇、『大戴礼記』用兵篇のみは明確に否定していた」ことを指摘する。

(12) 湯淺氏は、『荀子』が「人心と闘争との不可分の関係に言及」したと指摘するが、「結局は、憎むべき現実を礼によって規制せよと説くのみであった。」として、荀子の立場を蕩兵篇や用兵篇とむしろ対置するようである。氏はまた、『史記』律書や『淮南子』兵略訓が蕩兵篇や用兵篇に「類似している」と指摘し、『呂氏春秋』『大戴礼記』の「積極的戦争肯定論」「戦争の正当化の論理」が「漢代以降の軍事思想の中にも基本的に継承されていた」と推測する。

(13) 『淮南子』兵略訓はいわゆる義兵説として「貪味饕餮之人、殘賊天下、万人搔動、莫寧其所。有聖人勃然而起、乃討強暴、平乱世、夷險除穢、以濁為清、以危為寧。」と述べる。

(14) 『孫臏兵法』勢備篇に「孫子曰、夫陷齒戴角、前爪後距、喜而合、怒而鬪、天之道也、不可止也。」とあり『史記』律書に「兵者、聖人所以討強暴、平乱世、夷險阻、救危殆。自含血戴角之獸、見犯則校、而況於人懷好惡喜怒之氣。喜則愛心生、怒則毒螫加、情性之理也。」とあつて用兵篇や兵略訓に似る。

なお、律書のうちこの部分から「孔子所称有德君子者邪。」までの六百八十字は前後との脈絡を欠いており、律書の冒頭からこの部分の直前までが七十七字であることも併せ考へると、この六百八十字は行二十六字前後の竹簡二十六本が他篇から錯入したものと見るべきではなからうか。太史公自序に「非兵不强、非德不昌。黄帝湯武以興、桀紂二世以崩、可不慎与。司馬法所從來尚矣、太公孫臏王子能紹而明之、切近世極人變。作律書第三。」とあつてすでにこの部分を律書とするようだが、『廿二史劄記』卷一「史記律書即兵書」はこれを『史記』の佚篇である兵書に係る自序とみる。

(15) 小雅魚藻に「魚在在藻、有頌其首。」「魚在在藻、有頌其尾。」「魚在在藻、依于其蒲。」とあり、商頌玄鳥に「受命不殆、在武丁孫子。」とある。

(16) 既知の三家詩佚文や阜陽双古堆漢墓竹簡「詩」と『毛詩』との相違はそれほど大きくはなく、おおむね文字レベルの

異同にとどまる。なお王先謙『詩三家義集疏』は用兵篇の引詩「鮮民之生矣」を「齊詩」の蓼莪篇とするが、直ちには従いたい。

(17) 五詒や禹貢が「厥」を多用する他、清華大学藏戰國竹簡『保訓』にも「厥志」の句が見える。現行本『毛詩』の雅と頌は「厥」「其」を混用するが、国風は「其」を専用して「厥」を用いない。なお『爾雅』釈言に「厥、其也。」とある。

(18) 政治の善悪から禍福が生じる機序について盛徳篇は今之人称五帝三王者、依然若猶存者、其法誠德、其德誠厚。夫民思其德、心称其人、朝夕祝之、升聞於皇天、上帝歆焉、故永其世而豊其年。

今之称惡者、必比之於夏桀殷紂何也。曰、法誠不德、其德誠薄。夫民惡之、必朝夕祝之、升聞于皇天、上帝不歆焉、故水旱並興災害生焉。

と禍福を対にして説明する。用兵篇はこのうち前者とほぼ一致する

今之道堯舜禹湯文武者、猶威致王、今若存。夫民思其德、必称其人、朝夕祝之、升聞皇天、上神歆焉、故永其世而豊其年也。

という文によつて堯舜禹等を寿ぎつつ(第三段)、これらと無関係な文章によつて桀紂を批判しており(第四段)、その構成は盛徳篇に比較して明らかに不自然である。

(19) 「四代」の用例として宋永氏も挙げる『礼記』明堂位篇や学記篇はいずれも漢代に属すと考えられ、またたとえば

【漢書】王莽伝には「四代古宗、宗祀于明堂」とある。なお虞戴德篇に「三代之相授」が見えるが、これは虞戴德篇の中盤に認められる長文の追記よりも後に置かれている。

ついでながら、千乗篇は「四輔」「四佐」を説いており、虞戴德篇で孔子が「三公九卿」を説くのと合わない。「四輔」や「四佐」が王莽期を特徴づける政治的な用語であること、これらを含む千乗篇の部分には文脈に大きな乱れがあつて明らかに「周礼」とかわる文章が挿入されていること等から、千乗篇は千乗等七篇が七篇としてまとめられた後にも大きな改変を受けており、この改変は前漢末あるいは後漢にまで及ぶ可能性がある。【礼記】文王世子篇は「四輔」と「三公」とを整合的に理解しようと試みているが、これはむしろ文王世子篇の後代性を示すものであろう。

いずれにせよ、「四代」や「四輔」「四佐」等の語が戦国以前にひろく用いられていたと想定することは筆者には困難である。

(20) たえば諸志篇に

聖人有国、則日月不食、星辰不勃、海不運、河不滿溢、川沢不竭、山不崩解、陵不施、川浴不処、深渊不涸。於時龍至不閉、鳳降不翼、鸞獸忘攫、爪鳥忘距、蜂蜚不螫、嬰兒、蟲蟲不食天駒、雉出服、河出圖。

とあり、【春秋繁露】王道篇に

五帝三王之治天下、……毒虫不螫、猛獸不搏、抵虫不触。故天為之下甘露、朱草生、醴泉出、風寸時、嘉禾興、鳳凰麒麟游於郊。

とある等。

(21) 【爾雅】釈地は漢代の成書と考えられる。

千乗等七篇には他にも戦国以前には用例を得ない熟語や句法が多く認められる。個別の指摘は別稿に譲りたいが、もしも千乗等七篇が戦国末以前に「孔子三朝」としていったん成立していたものとすれば、現行の七篇はその全体にわたって多くの追記改変を被った、戦国期の原形をとどめないものと扱うべきであらう。

(22) 四代・虞戴德・少間の三篇は篇尾のみならず篇中にも「公日善哉」を多用する。

(23) 同じ【大戴礼記】中でも主言・礼察・勸学などの諸篇は「盈」字を避けていない。

「邦」字について言えば、【大戴礼記】全文を通じて、朝事篇のうち【周礼】大行人とはほぼ一致する部分に「邦国」として二例が見えるのみである。朝事篇には別に大行人の「邦国」を「域国」や「諸侯」に置換している箇所も認められ、現行本朝事篇の「邦国」は後人が「域国」から回改したものと疑われる。たとえば「越絶書」に「中邦」という奇妙な語が見え、吉本道雅氏は「周礼」や「越絶書」について「邦」の避諱を復元すべく「王莽期に「国」を機械的に「邦」に改めた」ことを想定する（『周礼小考』（立命館東洋史学会【中国古代史論叢】平成一六年）。「中邦」の語は『説文解字』にも見え、また『史記』夏本紀や【漢書】地理志に「中国賜土姓」とあるが偽古文【尚書】禹貢はこれを「中邦錫土姓」に作る。

(24) 『大戴礼記』全体の中で「啓」字を用いるのは夏小正篇と帝繫篇のみ。なお夏小正のいわゆる経文に「啓蟄」とあり伝には「言始發蟄也」とある。

(25) 末永氏は、千乗等七篇が内部で「吁焉其色」などの特徴的な表現を共有することを「千乗等七篇が同一の編者によつて比較的短期間に編まれた」ことを示唆するものだとし、七篇内部に認められる不統一については「千乗等七篇の素材の相違を示すに過ぎず、必ずしもこの篇が同一の編者によつて編まれたことを否定するものではないであらう。」とする。

用兵篇について言えば、第四段が「粒食之民」という表現を少間篇と共有するが、これは七篇を合綴した際あるいはその後の操作の結果とみることもできる。ちなみに「粒食之民」は『墨子』天志上・下の他には『法言』や『論衡』に見える程度で、『墨子』以外には先秦の用例として確実なものを見ない。

(26) 現行本『大戴礼記』少間篇が劉向所見『孔子三朝』よりも古い形を存している可能性については注(4)拙稿を参照。

(27) 末永氏は「その理由はわからないが、伝世の文献が伝える哀公孔子問答のほぼすべてが『孔子家語』に再録されているのに対して、千乗等七篇のそれが全く取られていないのも、この資料が他の哀公孔子問答とは異なる由来を持つものであることを暗示しているように思われる。」と指摘する。これは千乗等七篇の哀公孔子問答としての由来の新

しさ(と流伝の狭さ)を暗示するものだと解し得よう。『呂氏春秋』蕞兵篇はすでに「蚩尤作兵」を「人曰」という架空の發言としてこれに応える形で論を展開しており、あるいは用兵篇は、蕞兵篇の「人曰」をそのまま哀公言へすり替えて新たに哀公孔子問答を創出したものか。

王肅が『大戴(礼記)』を見ていたことは『孔子家語』弟子行篇の注により明らかだが、もしも『家語』が王肅の偽撰あるいは補編に出るもので、孔子に係る問答を網羅せんとするものであったならば、『家語』に千乗等七篇が採録されていないことは、王肅の見た『大戴』がいまだ『孔子三朝』を取り込んでいなかった可能性を示す。